



からこかぎ

第29号 令和2年6月26日(金)発行

唐古・鍵遺跡の保存と活用を支援する会

〒636-0247 奈良県磯城郡田原本町阪手233-1 青垣生涯学習センター唐古・鍵考古学ミュージアム内

TEL 090-9257-3688 Email: karakokagijimukyoku@swan.ocn.ne.jp

遺物紹介～縄文晩期の深鉢と弥生前期の甕

1 はじめに

今回は、第一室「縄文から弥生へ」のコーナーに展示されている縄文晩期の深鉢と弥生前期の壺を紹介します。深鉢と壺は、遺跡最北端の第66次調査(1997年 調査面積152㎡)の調査地全域に広がる自然河道から出土しています。唐古・鍵遺跡では、最も古相の土器資料です。土器を区分する目安として、人類学者の長谷部言人博士考案の分類図(次頁中段図 部分表示)があります。口径と高さを三等分にして基準としています。左1の甕は、頸部と胸部の接点が最大幅三分の二以上の土器、中央2の壺はそれ以下の土器です。右3の深鉢は高さが三分の二以上のものです。縄文時代は、甕は、深鉢と呼ばれています。展示の深鉢と甕の外面には、ススの付着があることから煮炊きに使用したことが分かります。

第66次調査報告書(文化財調査年報7)によると、縄文晩期の深鉢は最下層(河床直上)の埋土から、弥生前期の壺は下層(河床上位)埋土からの出土で出土層位は異なっています。この自然河道は、昭和11・12年の唐古池の調査(第1次)で確認された3条の砂層のひとつで池の南端で検出された「南方砂層」(弥生前期 南東→北西に流行)の延長と考えられています。第66次調査の3年後に調査された清水風遺跡第4次調査(奈良トヨタ前 下水道マンホール設置工事に伴う小規模調査)では、弥生中期後半の河川跡(北方砂層の延長)と縄文晩期の遺物包含層が確認されています。そこでは、縄文晩期の土器も出土しています(文化財調査年報9)。



第66次調査地と近接した場所での出土ですので、展示土器との関連が注目されます。

なお、同コーナーで並んで展示されている甕(上写真 インターネット画像より。以下、同じ)は、西地区北方の第37次調査の土器溜りからの出土で、前期中葉とのことですから時期が異なります。

2 縄文晩期の深鉢

展示深鉢は、縄文晩期土器の中でも最終型式の「長原式土器」とされています。長原式の深鉢は、先行する船橋式土器の深鉢と比べ頸部の外反や肩部の屈曲が弱く、さらに口縁部の突帯の位置が端部に接近するところが異なっています。また、突帯の刻み目も軽く浅く、間隔も不規則となってきます。展示の深鉢(右写真)は口縁部直下に断面三角形の突帯を持つなどその特徴をよく表しています。大阪平野を中心に出土する長原式土器は、弥生前期土器と共伴し、粉圧痕をもつ例も多く報告されています。奈良県内でも、弥生前期中葉の水田社(14Cの暦年較正年代:500calBC前後)が検出された御所市中西秋津遺跡に隣接する今出遺跡からも長原式の粉痕土器(24粒)が出土しています。



展示深鉢の14C測定値が、2005年に国立歴史民族博物館研究チームより報告されています(田原本町文化財調査年報14 123頁)。測定値は、西暦1950年を起点とする14C年代で2495±30calBP、較正年代とその確率は780-510calBC(90.5%)で、いわゆる「2400年問題」の中頃にあたり前550年より新しいと評価されています。なお、河内平野の水走遺跡(2540±40calBP)や宮ノ下遺跡(2510±40calBPなど)出土の長原式土器は前800~550年頃の較正年代が示されています。展示深鉢は、河内平野のこれらの長原式土器と比較し年代の新しい土器であることが分かります。

訃報 小河原駿三さん(東京都品川区)

令和2年6月11日、ご逝去されました。長年にわたり「唐古・鍵遺跡の保存と活用を支援する会」の活動を、応援いただき有難うございました。謹んで、ご冥福をお祈りいたします。

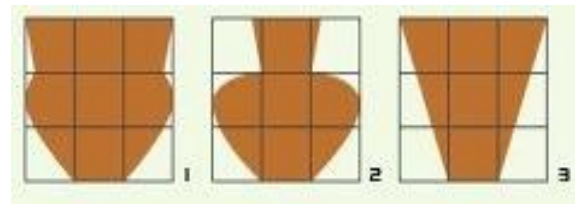
3 弥生前期の壺

畿内第Ⅰ様式は、土器表面を研磨し、ほとんどが黒褐色ないし灰茶色で、特に篋描（へらがき）文様で凸帯文様が多く、区分文様として段を使用するなどの特徴を持っています。展示土器（右写真）は、広口壺で、口縁部下に削出突帯があり球形の胴部段の直下には2条の篋描直線文を巡らすなど畿内第Ⅰ様式の特徴を有しています。報告書では、大和Ⅰ-Ⅰ-a様式と編年されています。大和Ⅰ-Ⅰ-a様式は、畿内様式に当てはめると、第Ⅰ様式古段階に相当します。ただ、畿内第Ⅰ様式は、前期の古段階と中段階を「削出突帯」の出現の有無で区分しています（『山城における弥生式文化の成立 二畿内第Ⅰ様式の細別』『史林』50巻5号1967年 佐原真）。展示の壺は、削出突帯がありますので畿内Ⅰ様式中段階に近い時期の土器だと思われます。展示土器の国立歴史民族博物館の測定値ですが、 $2460 \pm 40 \text{C BP} \cdot 590-470 \text{cal BC}$ （33.8%）で、「2400年問題」の後半、紀元6世紀よりも新しく前380年より古いとされています。なお、河内平野の水走遺跡（ $2540 \pm 40 \text{C BP}$ など）や山賀遺跡（ $2530 \pm 30 \text{C BP}$ など）出土の前期土器は前7世紀から6世紀頃の較正年代が示されています。これらの測定値を基に、前10～9世紀に北部九州で始まった弥生文化は、大阪平野では前7世紀から6世紀頃に、大和盆地ではそれより遅れて6世紀後半に到達したとされています。

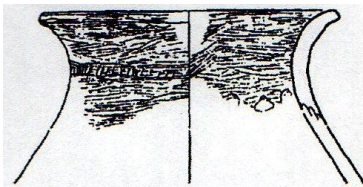


4 弥生文化の伝播

かつて、伝来した弥生文化の担い手をめぐり「主体者論争」があり、在来人主体説（縄文系弥生人）と渡来人主体説（渡来系弥生人）とに分かれ論議されてきました。長原式土器は、先述のとおり在地の縄文土器（突帯文土器）の最終型式で、また畿内第Ⅰ様式古段階は畿内地方の最初の弥生土器（遠賀川系土器）ですので弥生文化の到達時期を特定する指標となっています。これらの土器の評価についても、二つの考えが反映されていました。一つは長原式が終わった後に遠賀川系古



段階が始まったとする見方と、一つは同時に存在したとする見方です。前者は、在地の縄文人が水田稲作の技術をはじめ弥生文化を受け入れ転換したとする土器の「自生説」で、後者は西からの移住者（入植者）が在地の縄文人と住み分けて、交流を重ねて弥生文化が広まったとする土器の「並存説」です。



二つの土器が共伴した出土例が確認されていなかった時期の論争でしたが、今日では二つの土器の使用時期が重なり、同一遺跡からも出土しています。また、土器に付着する炭化物の ^{14}C 測定例が増加し、長原式新段階と遠賀川系古・中段階の土器が同じ年代値を示し、100～150年にわたり同時存在したことが分かっています。因みに、先述した水走遺跡の長原式土器と遠賀川系土器は、同じ ^{14}C 測定値を示しています。また、唐古・鍵遺跡第66次調査の最下層（河床直上）からも ^{14}C 測定はなされていませんが弥生前期とされる頸部に彩文をもつ壺の破片（左上写真）も出土しています。

以前は、北部九州と近畿の遠賀川系土器が類似しかつ広く斉一性がある点を根拠に、弥生文化は50年程度で近畿に伝わり、100年ほどで西日本全域に広がったとされていました。それは、前1世紀前半の前漢鏡が中期末の須玖式の甕棺墓に副葬されていることをもとに（交差年代法）、中期末を起点（時期）としてそこから土器型式を「一型式＝25年」と仮定し遡って均等割付する編年観を前提としていました。さらに急速に拡散した理由を「縄文人窮乏化説」に求めていました。

しかし、今日では、各地の発掘事例の増加に伴い、前10世紀後半に始まった九州北部の稲作が奈良盆地に伝わるのは前6世紀後半で、400年ほどかかったと考えられています。また、縄文期は当時の環境と適合し多様な生業を行ない長期間維持できたとする一方、弥生期の稲作生産性がさほど高くなかったとする見解も注目されています。むしろ、弥生文化の伝来が多くの時間を要したことを考慮し、長原式新段階と遠賀川系土器の同時並存の期間は、在地の縄文系の人々が伝来した弥生文化を、時間をかけて徐々に受容した時間と捉える考えが有力となりつつあります。

いずれにしても、展示されている二つの土器は、大和盆地に弥生文化が伝来した時期とその担い手を示してくれる重要なメッセージといえます。

（次項の用語解説(1)をご参照ください。）

用語説明（１）～放射性炭素年代測定法（¹⁴C 測定法）

1 年代測定

1946年、W・F・リビー博士によって検出された炭素14（¹⁴C）は、大気圏上層で宇宙線の作用で常時生成され、大気中で酸素と結合し二酸化炭素となります。¹⁴Cを含んだ二酸化炭素は光合成により植物に取り込まれ、動物はそれを摂取しています。そして、¹⁴Cを取り込んだ生物体の生命活動終了後、遺体内の¹⁴Cは、放射壊変（β線を放出）し¹⁴C濃度を次第に減少（5730年が半減期）させます。放射性炭素年代測定法（¹⁴C測定法）は、¹⁴Cの減少の程度を調べて活動停止からの時間を測定する方法です。¹⁴C測定法は、木材・骨・貝のみならず土器、石器に付着している植物のカス・ススや土器胎土中の植物繊維なども測定することができます。例えば、土器に付着している炭化物（スス・コゲ）の場合、土器が使用されていた年代が明らかにされますので、相対年代に位置付けられている土器型式編年を絶年代化することができます。

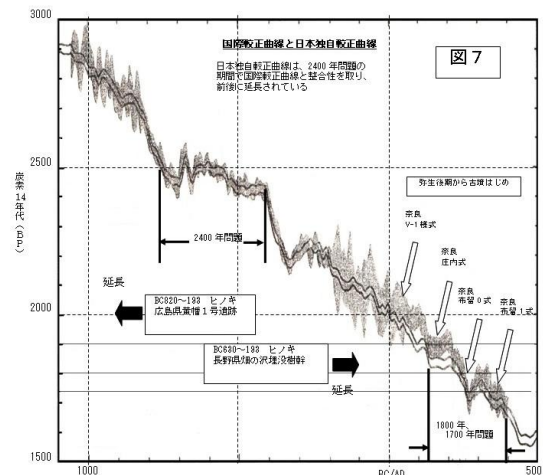
2 測定精度の向上

放射性炭素年代は、「BP」と表記され、核実験による放射線の影響を受けていない1950年を起点としてそれから何年前という計算上の年代を表しています。¹⁴C測定法は、大気中の濃度が一定ということが前提で計測しています。しかし、大気中の¹⁴Cの生成量は、地球磁場や太陽活動の変動さらには海洋に蓄積された炭素の影響を受け実際の年代との誤差が生じています。そのため、近年は次の三つの手法を採用し、「BP測定値」の精度を高めています。

一つは、年輪年代法や年縞堆積物を活用し作成された「国際校正曲線（INTCAL）」をもとにBP測定値の較正がなされて暦年代に換算しています。calibrated（較正済み）の炭素年代は、「¹⁴CBP」（1950年を起点）と表記され、西暦を基準とする場合は、「calBC（AD）」と表され「暦年代」と呼ばれています。さらに、同一試料を複数回測定し、「確率法」とよばれる統計処理がなされています。測定値の分布が密集（確率密度が高い時期）する時期を特定し、95.4%確率と68.2%の確率間で年代幅が絞り込まれています。

一つは、AMS法が使われ、試料量・測定時間などが改善され高精度・高効率化が図られています。1980年代まではβ線法（壊変する際の放射されるβ線をカウント）が採用されていましたが、AMS法は、加速器質量分析計を使用し、¹⁴Cを原子イオンに加速し→磁場で他の原子イオンと分離し¹⁴Cを直接カウントする測定法です。統計誤差は、±80（長時間の測定では±40）まで精度が高まっています。

さらに一つは、¹⁴C較正曲線と木材試料（複数の年輪層）の¹⁴Cデータが示すパターンの双方の形状をマッチング（調整しすり合わせ）して年代を特定する「ウィグルマッチング法」を採用しています。特に、年代幅が不明瞭な時期（右表較正曲線が平坦な時期）の年代幅を絞り込むことが可能となっています。唐古・鍵遺跡第93次の大型建物の年代測定にあたって、年輪層が分かる柱根をAMS法で¹⁴Cを測定し、伐採年を示す表皮直下の層から順に10年間隔の100年分のウィグルマッチングがなされ高精度の年代測定がなされました。因みに、大型建物の柱の統計上の較正年代は、275BCと175BCの二つの可能性を指摘し170BCに伐採された可能性が最も高いとしています。



3 導入事例

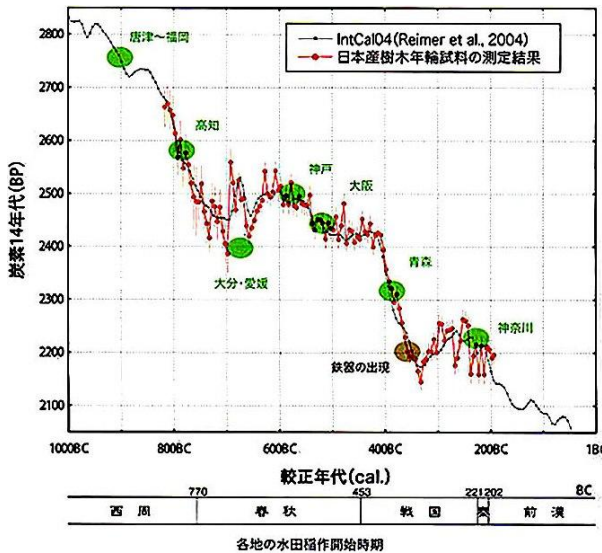
¹⁴C測定法の導入初期の1959年に横須賀市夏島貝塚の縄文早期の地層から出土したカキ殻（9450±400BP）と木炭（9240±500BP）が測定され縄文早期が9500年前に遡ると報告されました。その後、青森県東津軽郡大平山元Ⅰ（おおいやまもといち）遺跡から出土した縄文草創期の無文土器片（左写真）に付着した微量の炭化物からは、13780BP（16540calBC）という測定値（AMS・INTCALを初めて使用）が報告されています。当時は、縄文土器が世界最古の土器と驚かれました。さらに衝撃的だったのは、2003年の日本考古学協会総会で国立歴史民族博物館が発表した「弥生時代の開始期が前300年より500年遡る」とする報告でした。そこでは、弥生早期と前期の境界と考えられていた11点の北部九州の弥生前期土器（刻目突帯文土器 夜臼Ⅱ～板付Ⅰ式土器）を¹⁴C測定



し、2520¹⁴CBPから2770¹⁴CBPの間の測定値が報告され、1点を除いて10点が較正曲線の水平部分（2400年問題）にあたらぬ「前820～790年」でした。また、測定した土器資料よりも夜臼Ⅰ式や山の寺式土器（弥生早期土器）がより古いので、土器一型式の想定期間（25～50年）を根拠に水田稲作はそれ以前の前9～10世紀に始まった可能性を指摘していました。その後、佐賀県唐津市菜畑遺跡出土の土器（山の寺式）からは、2730±40¹⁴CBP、2710±40¹⁴CBP、福岡市橋本一丁田遺跡の水田跡から出土した土器（夜臼Ⅰ式）からは、2765±35¹⁴CBPという最古の値を示し、いずれも前10世紀後半にあたることが分かりました。因みに、それまでの年代観は、早期（前5世紀半ば）、前期（前3世紀頃）、中期（前1世紀頃）そして後期（1世紀半ば～3世紀半ば）でした。

3 2400年問題

その後、多くの遺跡の¹⁴C測定がなされ、水田稲作の広がりも明らかになってきました（左表「各地の稲作開始期」）。前10



世紀後半の北部九州から前9世紀末には高知平野に伝播し、南九州や東九州や西部瀬戸内には前8世紀～7世紀に始まり、近畿地方では前7～6世紀に神戸市付近、さらに前6世紀に河内で始まり、奈良盆地には少し遅れ前6世紀後半から5世紀ごろに到達したと考えられています（「新弥生時代」131頁 藤尾慎一郎）。残念ながら、畿内の弥生時代の開始は、年代の特定が困難な期間（較正曲線の水平部分）にあたっています。その時期は、太陽活動の停滞期にあたり、宇宙線の強度が増し¹⁴C濃度の時間変化がほとんどみられない領域（2400BP前後）に相当し、前750～前400年の350年間続いたとされています。較正曲線の水平部分は、大気中の¹⁴Cの濃度が急激に増加し、それが時間をかけて戻る状態を反映したものと考えられています。紀元後3世紀頃にも「1800年問題」・「1700年問題」といわれる100年程度の較正曲線が緩やかな時期（前頁中段 較正曲線右隅）があります。それ

が弥生終末期から古墳前期で、卑弥呼の死亡の前後にあたります。

4 唐古・鍵遺跡の年代測定値

唐古・鍵遺跡ですが、2001年から4回ほど田原本町教育委員会が提供した土器・木製品・種子などを国立歴史民族博物館研究チームが¹⁴C測定を行っています。提供資料は、前期から後期に及んでいて、この¹⁴C測定値は畿内の年代測定の重要な指標となっています。歴史民族博物館の報告は、「田原本町文化財調査年報14」に掲載されています。¹⁴C測定値よりも発掘報告書が優先するという国内の慣行があり詳細は明らかにされていませんが、最終頁には「年代的考察」（下表にまとめる）が報告され、¹⁴C測定値は同博物館¹⁴C研究チームが蓄積してきた弥生時代の年代観と適合しているとのこと。なお、国立歴史民族博物館が提示している年代観は、弥生時代早期は前10世紀頃、前期は前8世紀頃から始まり、中期は前4世紀頃から、後期の始まりは紀元50年ごろからとして、従来の年代観が見直されています。

(参考)	測定土器の暦年（一部文言付記修正）
① 弥生前期：	大和Ⅰ様式（畿内Ⅰ古段階）は、紀元6世紀より新しく前380年より古い。（2400年問題相当期） 大和Ⅱ-I-b様式（畿内Ⅰ新段階）は、前380～350年に相当する。（2400年問題平行期を抜ける）
② 中期前葉：	大和Ⅱ様式前半が前380年以降の前4世紀前半。 大和Ⅱ様式後半（畿内Ⅱ様式）が前350年を含む前4世紀後半
③ 中期中葉前半：	大和Ⅲ-1・2（畿内Ⅲ様式古）は、前300年頃を含む前3世紀
④ 中期中葉後半：	大和Ⅲ-3・4（畿内Ⅲ様式新）は、前200年以降前50年よりは確実に古く おそらくは前100年以前の前2世紀を中心とする年代
⑤ 中期後葉：	大和Ⅳ-1様式（畿内Ⅳ様式前半）は、前100年を含む可能性があり前50年より古い前1世紀前半 大和Ⅳ-2様式後半（畿内Ⅳ様式後半）は、前40年頃を中心とする前1世紀を含む時期

雑学(1) 土器の起源

(1) 20世紀を代表するイギリスの考古学者ゴードン・チャイルド(1892~1957)は、西アジア起源の農耕(新石器革命)



の生産力の高まりに着目し、生まれた余剰が社会的分業を進展させ都市文明や国家を形成(都市革命)したとして
います。「土器の起源」は、野生ムギや野生小動物を採取・狩猟する段階ではなく、新石器時代の農耕・牧畜の「食
糧生産の時代」に求めています。穀物食料の準備と貯蔵が土器の製作を促し、西アジアの農夫の妻が「人間が化学
変化を自覚して利用した最初の道具」を生み出したとしています(G.チャイルド「文明の起源」(上)岩波新書・
「歴史のあけぼの」岩波書店)。その時期は、オリエント文明の隆盛期のBC7000年ごろとし、それが長らく世



界の考古学の定説となっていました。

それを覆したのが、1950年の縄文時代早期の燃系文土器が出土する神奈川県横須賀市夏島貝塚のカキ殻と
木炭の¹⁴C測定値で、縄文早期が9500年前に遡ると報告(3頁参照)されています。その後、国内では、

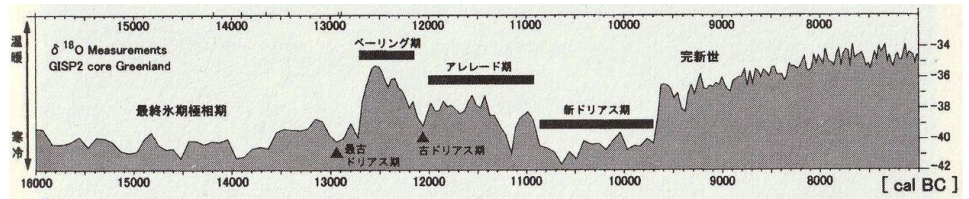
1960年には長崎県佐世保市福井洞穴遺跡の隆起線文土器の付着物が12400±350年BPという¹⁴C測定値が
報告されました。また、1962年に調査が行われた愛媛県久万高原町上黒岩岩陰遺跡では、尖頭器や女神像線刻
礫(「旧石器のビーナス像」左上写真)とともに14500年前(同一地層の木片の¹⁴C測定値)の細隆起線文土
器片(左下写真)が出土しています。さらに、1970年には佐世保市泉福寺洞窟遺跡からは隆起線文土器が出土



した地層のさらに下層から豆粒文土器(右写真¹⁴Cは測定されていません)が出土しています。そして、前述のとおり、1999
年に青森県東津軽郡大平山元I遺跡から出土した縄文草創期の無文土器片に付着した微量の炭化物からは、13780BP

(16540calBC)という測定値が報告され、当時は、世界最古の土器とされました。なお、同遺跡から出土した石鏃は、今日
でも世界最古と評価されています。因みに、旧石器時代と縄文時代の区別は、ヒトの定住化や弓矢の使用そして土器の使用等が
識別の指標となっています。

(2) かつては土器の起源について、チャイルドの提唱のように「一元説」が主流でしたが、大平山元I遺跡をはじめ日本国内
各地で古い年代の¹⁴C測定値が相次いで報告されたことから「多元説」が有力となっています。それを裏付けるように海外でも
古い年代の土器が報告されています。特に、中国湖南省や江西省の遺跡から1万5千年~1万8千年前の土器や2万年前に遡
る炭化材とともに同一地層から土器が発見されています。また、シベリアアムール
川流域の遺跡から1万5千年前の土器が報告されています。北アフリカでも1万年前
の土器が発見されているとのことです。



(3) 1万5千年前をはるかに遡る大平山元I遺跡の土器ですが、その時期は最終氷期(ヴュルム氷期 7万年前から1.2万
年前)にあたり、現在の完新世でなくその前の更新世に属しています。特に、2万1千年前から1万9千年前は最終氷期の最
寒冷期で、地球全体で現在より平均気温で5度ほど低く、降水量も10~20%程度で乾燥していたとされています(上表は、
気温推移表 暦博フォーラム資料の一部抜粋)。因みに、氷河期は、日本列島は大陸と陸続きになり日本人の祖先は獲物を追って
日本列島にきたとされていましたが、近年の研究では氷河期の最寒期でも津軽海峡や対馬海峡には一部海が残り陸続きになっ
ていなかったことが分かってきています。



その後、1万6千年前から1万2.5千年前にかけて温暖化の傾向(ベーリング/アレレード期)を示していますが、
「寒の戻り」といわれる「新ドリアス期」(終期が完新世の開始期)が1万2.9千年前から始まり1300年ほど続
きます。農耕の開始はこの時期と考えられ、メソポタミア西部のシリア「テル・アブ・フレイラ遺跡」では13000
年前の最古級のライムギの農耕痕跡が発見されています。

かつてはチャイルドの主張のように土器の起源について農耕との関わりで論じられてきましたが、明らかに農耕の開始と土器
の出現時期が異なっていることが分かります。始原期の土器からは微量の炭化物が検出され、当時の亜寒帯の針葉樹林が広がる
厳しい生活環境の中で、大型哺乳類を対象とする狩猟によって得た動物資源などを煮炊きに使用したのと思われる。

(4) 土器は、粘土を焼成して作った素焼きの器物ですが、同じ土製品に「土偶」があります。国内最古は、三重県松阪市粥見井尻(かゆみいじり)遺跡から出土した小型の土偶(前頁左下写真)です。共伴土器の付着炭化物は、13417~13145calBCの値です。1万3千年前の土偶(左写真)が出土した滋賀県東近江市相谷熊原(あいだにくまはら)遺跡のよりも若干古いものです。いずれの遺跡からも旧石器時代と縄文時代を識別する指標となる「定住化」を裏付ける複数の竪穴住居や石器(石鏃:弓矢の使用を裏付ける)とともに「土器」などが出土し、縄文草創期の集落遺構といえます。



因みに「土偶」ですが、大分県豊後大野市岩戸遺跡から国内最古のコケシ形石製品(右写真)が出土しています。2万4千年から2万年前と推定され最終氷期にあたります。遺跡では、石器は出土しますが、さすがにこの時期では土器は出土していません。また、国内最古とされる大阪府藤井寺市はさみ山遺跡(梨田地点)の住居址(竪穴住居)からも2万年前のナイフ型石器や剥片・石核が出土していますが、やはり土器は出土していません。

遺跡紹介 田村遺跡群 ~ 弥生最大の集落遺跡

1 概要~弥生早期からの遺跡

高知県南国(なんこく)市にある田村遺跡群は、高知空港(現 高知龍馬空港)の拡張工事に伴う第一次(調査面積 17300 m²)と二次(調査面積 153710 m²)の調査により弥生時代を含めその全容が明らかになった遺跡です。縄文時代は、前期・中期はわずかな遺物が出土するのみですが、後期になると遺構(土坑・ピット・焼土跡など)・遺物量が増加し、四国西南部や北九州など他地域の土器が出土し活発な交流があったことが分かります。

遺跡では、第一次調査により弥生前期初頭の集落像が、さらに第二次調査では弥生前期から後期にかけて集落の変遷が明らかになっています。特に、弥生中期後半から後期前半では、竪穴住居(393棟)、掘立柱建物(184棟)、土坑(2000基以上)、溝(366条の大半)などが検出され、国内最大の弥生集落と評価されています。

今回は、弥生前期初頭の集落に着目し前期の田村遺跡の集落動向を報告します。前期初頭の集落遺跡は、奈良盆地では検出例は少なく、北部九州を含めその実態が分かっていません。南四国地域では、前期土器(畿内第I様式期)を細かく区分し、前期I(東松木式)・前期II(西見当I式)・前期III(西見当II式)・前期IV(大篠式)と編年されています。前期初頭(I期)の時期ですが、板付I式期に相当すると報告され、前9世紀末~前8世紀とされています。因みに、東松木式土器は、西方25kmにある前期水田跡が検出された土佐市居徳(いとく)遺跡出土の遠賀川系土器(付着炭化物 2630±60¹⁴CBP 前7世紀)よりも一土器型式ほど古い土器です。なお、田村遺跡群の名称は、広範囲の調査に加え縄文期から近世に至る複合遺跡ですので、一括して「群」という表示をしたと報告書に記載されています。

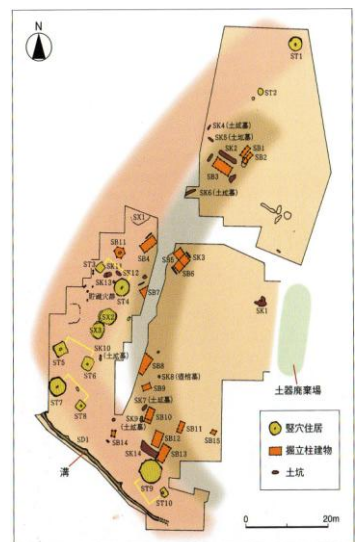
2 地形~物部川下流

遺跡は、剣山系の白髪山(1770m)を水源とする物部(ものべ)川下流域の現標高6~9m(北西→南東)の扇状低地上に立地しています。遺跡周辺では複数の旧河道が検出されていて、その河口付近には砂礫供給により形成された浜堤がみられ、その内側には浜堤に遮られた潟湖(せきこ)が広がる旧地形が復元されています。扇状低地は、沖積世(縄文海進)の粒径の大きい砂礫などによって堆積しているため透水性の高い軟弱地盤です。

現在の物部川下流域の河床勾配(高さ1m上がるのに必要な距離)は、1/280で通常の下流域は1/1000~5000程度ですのでかなりの急流河川です。また周辺は今日でも高温多雨の土地柄です。河床勾配が大きいと集中豪雨などにより遺跡は土石流や泥流に襲われたことが予想されます。また眼前に潟湖が広がる当時の復元景観からも海水準の変動(海退進)の影響が大きかったことが推測できます(現海岸線から3km)。後述する集落の移動や環濠の築造はこれらの地形が一因とも考えられます

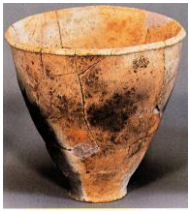
3 前期初頭(前期I)の集落~環状集落と松菊里型住居

第一次調査では、潟湖に近接する南エリアの微高地(北東から南北方向の自然堤防)の縁辺部に馬蹄状に広がる前期初頭の集



落遺構（前頁下 平面図）が発見されました。27,000㎡（270m×110m）ほどの集落域からは、竪穴住居・掘立柱建物のほか複数の溝・土壇墓・壺棺墓などが確認されています。注目したいのは、広場を中心に環状に広がる縄文時代の「環状集落」と類似した配置です。環状集落は、縄文早期末には関東平野に現れ縄文中期から後期に東日本に多く見られる集落構造で、西日本では殆ど見られません。大規模の環状集落であっても、同時存在の住居数は5～6軒から10軒程度で構成員は30～50人程度といわれ、血縁家族などの単位集団が集合して形成したと考えられています。前期初頭の田村遺跡の場合も、その配置や棟数から血縁集団を中心に形成され、短期間維持された集落であったと思われます。検出された竪穴住居群（10棟）は微高地の南端から西南端のカーブに沿って馬蹄状に配置され、その内側にも同じく馬蹄状に広がる掘立柱建物群（16棟）があり、その周辺に土坑墓（8基）・壺棺墓（1基）が検出されています。遺跡では、弥生時代の特徴とされている集落域と墓域の分離はみられず、縄文時代の墓域配置が持続しています。

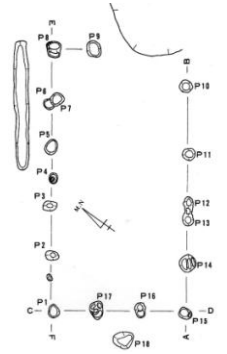
竪穴住居群の中には、方・円形の松菊里型住居が含まれています。松菊里型住居ですが、朝鮮半島南西部に起源をもち北部九州には弥生早期（最古は江辻遺跡）に水稲稲作とともに伝わり、前期になると僅かですが西日本に広がりました。田村遺跡の松



菊里型住居は、前期初頭ですので極めて早い時期のものといえます。

竪穴住居群は、大小5棟に区別され、大型住居からは紡錘車や石器剥片などが偏って出土することから作業場としての利用を想定でき、既に集落内の分業システムが確立していたことがわかります。そこからは、集落を維持統制する仕組みがみえてきます。小規模集団といえる集落規模ですので年齢や技術など属人的特性によってリーダーが決定されたと

考えられます。これは、縄文時代の集団を統制するシステムが継続されていたものといえます。階層分化を背景とする「首長」でなく講学上の「ピクマン」と呼ばれるリーダー像が想定できます。



3 前期初頭（前期Ⅰ）の住居址～棟持柱建物

掘立柱建物群は、規模や柱穴の大きさから高床式倉庫と住居とに区分され、9棟の倉庫が確認されています。注目されるのは、調査地北東端で検出された棟持柱建物SB1（右上 平面図）で、梁間3間・桁行5間の33.6㎡の大きさです。国内では、弥生前期の棟持柱建物は2棟検出されていますが、前号の会報で紹介しました三重県松阪市筋違遺跡（前期 棟持柱建物4×2間7.8㎡）よりも早い前期初頭の建物です。なお、柱穴からは、在地のチャートの石核（1点）と剥片（6点）が出土していますので、東日本の縄文期の集落遺跡にみられる作業場や集会所であったと思われます。

注目されるのは、縄文晩期の刻目突帯を持った深鉢の形態を持続する一方、外傾接合や刷毛目調整など朝鮮半島の無文土器（遠賀川式土器）の技法が見られる土器（松木式土器 左上写真）が集落内から出土しています。これは、縄文晩期土器が淘汰されずに変化し続けた構図です。在地の縄文系の集団が、伝来の弥生文化を受容した過程を示しているといえます。なお、先述の松菊里型住居からは在地の粘土を使用した松菊里式土器が出土しています。



4 前期初頭（前期Ⅰ）の生業～小区画水田とソバ栽培

次の前期前葉（Ⅱ期）の集落域（右写真 配置図）ですが、前期初頭の集落から窪地（低地部）を挟んだ北西400mの微高地（前期初頭集落より1.5～2m程度高い）に移動しています。移動後の集落内部には自然流路（幅20m深さ4m程度）があり、



流路を挟んで居住域は南東・南西に2箇所確認されています。住居は、竪穴住居のみですが、東に2棟（大型円形の松菊里型住居と小型住居）、西に2棟（小型松菊里型住居と小型住居）検出され、前期初期（Ⅰ期）と同様の一対の関係を維持しています。しかし、集落の中心部には大型を含め土坑（60基）が検出され、前期初頭（Ⅰ期）の集落配置とは明らかに異なっていて、遺跡内では弥生化が進行していたことがわかります。

前述のⅠ期とⅡ期間の窪地部からは、前期初頭（Ⅰ期）からの小区画（1辺2～5m程度）の水田址（左写真 約7000㎡）が検出され、南北の微高地の緩傾斜（北東→南東）を利用した水田経営が継続していたことがわかります。前期初頭（Ⅰ期）の集落域からは、石包丁が8点ほど出土し内6点は搬入品です。長崎県対馬島南部の石材と想定される堇青色ホルンフェルス製

(右下写真)で、北部九州では同石材を使用した初期石包丁の出土例(博多遺跡群など)が報告されています。稲作の伝来ルートを想定できる石材といえます。しかし、前期前葉(Ⅱ期)の石包丁の石材は、遺跡周辺で採取可能な頁岩や粘板岩を使用していて、この時期に集落内の製作が始まっていたことがわかります。

注目したいのは、プラント・オパール分析の結果報告です。前期の水田土壌の「イネ花粉比率」(1 試料から検出されるイネ科花粉に対するイネ属の比)が高いのである程度の集約度の高い水田経営がなされていたこと、さらにヨシ類が全く検出されないことより付近は乾燥した土地条件であったことが推測されています。なお、遺跡からは、熱帯ジャボニカの葉緑体DNAを持つイネも発見されています。



特筆すべきは、ソバ花粉(虫媒花)が第一調査地北側で集中的に検出されたことです。ソバ花粉の出現率の推移(下層では出現率が高く上層では低い)をみると、縄文後期から弥生前期はイネとソバが同一場所で栽培され、弥生後期以降はソバの栽培は他の場所に移動したと推測されています。ソバは、乾燥した土地で生育し湿潤した土地条件では不適といわれています。朝鮮半島では櫛目文土器後期(4000年前)以来畠作が行われていましたが、アワ・キビ・ヒエなどが検出されていますがソバは全くみられません。国内では、ソバ花粉は縄文前期より検出され、後・晩期には北海道を含め東日本中心に十数例ほど報告されています。菜畑遺跡・板付遺跡からは僅かにソバ花粉が検出されていますが、畠作が想定される弥生前期の遺跡からは、アワ・キビ・ヒエ・ムギ類・マメ類などが検出され、ソバ花粉は三重県津市納所遺跡など僅かです。田村遺跡では、ソバ栽培が継続的になされ、それは縄文農耕(焼畑農耕)の流れをくむものであったと思われる。

また、遺跡内では、弥生時代を特徴づける大陸系磨製石器とともに管状の石錘や磨製石鏃など漁猟や狩猟具が多く出土していて、縄文時代以来の多様な生業形態を持続していたと思われます。これは、縄文時代を狩猟採集社会とし、弥生時代を水稻稲作社会と規定する時代区分の指標が、前期の田村遺跡では必ずしも適合していないことを示しています。

5 前期中葉(Ⅲ期)から後葉(Ⅴ期)～最盛期から環濠集落

前期中葉(Ⅲ期)になると、前期前葉(Ⅱ期)の集落域を持続し、竪穴住居(9棟)や土坑(貯蔵穴など170基)が検出され、前期段階の集落の最盛期を迎えます。しかし、その後の前期中葉後半(Ⅳ期)になると、遺構・遺物量は大幅に減少し、竪穴住居(1棟)・土坑(18基)のみですが、この時期に自然流路の西側に3条の半円状の滞水痕跡のない環濠(右写真 上部北側の流路・中央東西の直線状の内環濠・右土坑群)が形成されました。内濠(幅2m 深1mU字断面)・外濠・最外濠がほぼ並行し、環濠内の集落範囲は24000㎡と推定されています。朝鮮半島南東部に集中的に分布する環濠集落ですが、弥生前期前半までは北部九州を中心にみられますが、前期後半から中期になると西日本各地で散見されます。検出された前期中葉の環濠ですが、既に中期の環濠の特徴である「多条化」がみられます。環濠は、北部九州の前期段階では朝鮮半島の影響を受け確かに防御機能を有していますが、田村遺跡の場合、先述した物部川の河床勾配などを踏まえすと、給排水機能の洪水対策が想定できます。



そして、前期後葉(Ⅴ期)では環濠は短期間で埋没し、集落は解体し3つの均一な小規模集落に分散します。その後、中期前半まで小規模集落は持続されますが、中期後葉にいと前述の通り大規模集落に変容します

6 結語～縄文・弥生文化の交差ルート

北部九州からの稲作伝来について、3つのルートが考えられています(「歴博研究報告」183集 藤尾慎一郎)。まず、山口県下関市綾羅木郷遺跡から始まる日本海ルートですが、前7世紀には鳥取平野に到っています。瀬戸内ルートは、前7世紀ごろには岡山平野に至り、前6世紀の終りには奈良盆地に到達します。田村遺跡は、二つの伝来ルートよりも先行し、太平洋ルートの玄関口といえる遺跡です。堅田遺跡のある和歌山、さらに伊勢湾西岸を通り前2世紀には神奈川小田原市中里遺跡に到ります。

今回報告しました弥生前期初頭の遺構・遺物をみますと、田村遺跡は、縄文文化と弥生文化の融合した遺跡であることがわかります。太平洋ルート(黒潮ルート)は、縄文後晩期から弥生前期の人の交流を含む相互交通の流通ルートで、稲作の伝来ルートでもあり東日本からの縄文文化の伝来ルートでもあったと思われる。

(編集委員)

東 治雄 植田洋高 谷口敬子 福島道昭 藤原隆雄 万徳順一 宮川真由美 井上知章(文責在編集員)

